

ソードアートオンライン 白き悪魔

椿 装花

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

白き悪魔が、あの世界にいたら、という話です。

はじめまして。下手で、誤字もアリアリかも知れませんが楽しんでください。

目次

アインクラッド(1)	
閉ざされた世界	1
閉ざされた世界(2)	4
会議	7
その後・・・	9
ボス戦	12
討伐作戦	17

アインクラッド（1） 閉ざされた世界

俺いや僕の名前は、雨宮雪奈

ネットゲーマーである。

とくに、世界初のフルダイブのゲームは、楽しみで・・・

って、何自分のことを語ったりしてるんだらう？

まあ、いいや。あと1分で、SAOの正式サービスが開始される。

「おにーちゃん」

「ん？なに？」

「行ってきます。」

「いつてらっしやい。」

聴いてのとおり、僕には、妹がいるけど仲は、んー、まあまあと思う

良くもなく、悪くもなくって感じ

「そろそろか、」

と言うとサービス開始まで、あと10秒くらいになっていたのでは、
とは、ナーヴギアをかぶって待つておくことにした

そして、サービス開始時間の13時00分になり、

「リンク・スタート」と言う僕はふわり、とした光に包まれてこの世界に戻ってきた

「帰ってきたんだ、この世界に」と噛み締めるように呟く

とりあえず僕は、なじんだ狩り場に行くために走り出そうとして、
、止められた。

「ねえ、その・・・私に・・・道案内・・・お願い出来ないかな？」

「ん、：別に・・・かまわないけど。」

「そっかありがとう、とりあえず、自己紹介しようよ。私は、サキって
言います。よろしくね。」

「あ、うん、僕はユキナ」

んー？なんか聞いたことあるけどな・・・サキって・・・まさか、ないな

い、同じゲームに、同じ時間に、ログインしてる幼馴染なんて絶対いない！・・・はず・・・

「ねえ、もしかして、雨宮雪奈君？」

「ああ、て言うかここでは、リアルネームは、禁句だぞ」

「分かったよ。ユキナ君それよりも、偶然だね。とりあえず一緒に狩りに行こうよ」

そういって、僕はなじんだ狩り場に行くために歩きだした。・・・が、また誰かに止められた。今度は、誰

「なあ、あんたたち、待つてくれよ。」

早く行きたかったので、少し声を荒げました。

「だれ・・・」

「まあ、そう警戒すんなって。おれは、クライン、俺の隣がキリト、そして、その隣が、アスナ、その隣がユウキだ。お前たちの名前は何なんだよ？」

「いきなりなれなれしいね」

「まあまあ、ユキナ君落ち付いて、私の名前は、サキ、でこつちが私のパートナーのユキナ君」

「よろしくな。ユキナ、サキ」

「うん」

俺は、無言でクラインの手を握り返したやっただけだった。

「ユキナくん大丈夫よ。あの人本当は優しいから。」

「いや、さつきは冷たく対応して悪かった。えーと、アスナさん？」

「さんはつけないで」

「分かった」

「はじめまして、ユキナさん」

「はじめまして、ユウキさん」

「ねえ、シロ、僕とフレンドになろうよ。あと、さん、いらぬからユウキって呼んでね。」

「ん…………ごめんフレンドはやだ」

「そっか、」と明らかにがっかりした声を出すので「別に友達が欲しくない訳じゃない…………ただ…………少し理由があった…………だけ」

と言うとユウキは気を使つてか、「無理に話さなくても良いから」と言つてくれたので僕はそつと小さな声で「ん……ありがとう」と言うときリトが痺れを切らしてか小さい声で「あのくそろそろ圏外に行きませんかね」と言う声で僕達は圏外に出発した

閉ざされた世界（2）

「私の世界へようこそ」

なっ、どうゆうことだよ!!

私の世界？まさかこいつ・・・

「私の名前は、茅場晶彦この世界をコントロールできる唯一の人間だ」
やっぱり、こいついったい何をしたいんだ？まさか…イベント？

「これは、イベントなどでは、無い、そして、メインメニューウィンドーからログアウトボタンが消えているのにきずいているだろうだが、これはソードアートオンライン本来の仕様である」

それなら、もう、帰れないじゃないか・・・現実へ

「それと、この世界でのあらゆる蘇生手段は、機能しない。そして、この世界で、死亡した場合、現実世界でナーヴギアが発する高出力マイクローエーブが、諸君らの脳を破壊し、生命活動を停止させる。」

どこかで、叫び声が聞こえたが、そんなのどうでもよかった。

この世界で、死んだら現実でも死ぬ、そんなの、もうゲームじゃない
い

「それと、ナーヴギアの破壊、電力供給の停止、回線切断、このいずれかが行われた場合脳破解シークエンスが行われる」

「そんなの、そんなの瞬間停電なんかがあつたらどうすんだよ」

クラインが叫ぶ

「正確には、2時間以上の回線切断、及び2時間以上の電力供給の停止、ナーヴギアの破壊行為、ナーヴギアの分解、このいずれかが行われた場合、脳破解シークエンスが行われる」

死んだら、本当に死ぬ、「これは、ゲームであつても遊びでは無い、あの雑誌でのコメントはこういう意味だったのか？

「最後に、この世界が現実であるという、証拠を君たちのアイテムストレージに送っておいた。」

俺たちの様々なプレーヤーは、プレゼントボックスを確認した。

ー手鏡ー

ただの手鏡か？

と、思ったら、隣にいたサキ、アスナ、ユウキ、キリト、が光に包まれた。

そして、俺も、

変わったことは、顔

特徴的な顔、そして腰まで届く長い黒髪、そして緑瞳……つてことは、……

「僕じゃん!!!」とつい叫んでしまったらサキも釣られてか、「これ私じゃん!!!」と叫んでいた。

ふと、僕が上を見るとそれをまるで待っていたかのように茅場が言葉を発した

「諸君らは、これでわかったと思う。これはゲームであって遊びではない

以上で、ソードアートオンライン正式サービスのチュートリアルを終了する。」

しん、と音が無くなる

周りにいたプレイヤーたちがまだ信じられないようで泣いたり、叫んだりしている

「サキ、来い!」

「う、うん」

隣では、キリトも、同じようにユウキや、アスナを引っ張り出していた

「何?キリト君?」

「良いか?これからは、生きていくために強くなる必要がある今、一緒に来るのなら、俺は、安全なルートも知っているから何とかなる。」

「ごめんキリト、ボク、アスナと一緒に残る」

「そうか」

クライン、おまえは、

「悪いなキリト、一緒には行けねえ、でも、でもよ、生きろよキリト
何があってもあきらめんなよ」

「ああ、あきらめない、約束する。」

「ユキナ君私、ユキナ君と一緒に行く！」

「でも、……」

「ユキナは私と一緒に行くの!!」

「でも……」

と僕が言うとサキが「仕方ないなあ」と言って

「どんな時も、私がユキナ君が守るから

だから、一緒に行こう」

僕は少し考えてヤケクソ気味に言い放った

「分かった。分かったよ。好きにしてくれて構わないから

僕と一緒に行こっか、サキ」

と言うとサキは何故か笑顔で

「良いよ。」

と言ってくれた

そして、僕たちはキリト達と別行動を始めた。

会議

このデスゲームが、始まって1か月がすぎたが、外部からの救済処置は何もなく、そして2000人が死んでいった。

ベータテスターである僕でさえ、第1層を攻略できていなかった。

そして今日、ボス攻略会議が行われる。

「ユキナ君、ユキナ君ってば、」

サキが、呼んでいる、いや、呼んでいるのではなく起こしてくれているのだしかし、僕はその起こしてくれる声に限界まで拒否した。

「ユキナ君、キリト君から、攻略会議に誘われてるよ。行かないの?」

「んー、うにゅ、行くよ。行く、今起きるから」

「早く出発しようよ」

「うん、行こう攻略会議へ」

ボス攻略会議 会議場

「やつほー。サキ、ユキナ久しぶり。」

「久しぶりだね。ユウキあ、あとアスナも」

「うん、久しぶりサキさん、シロ君」

「久しぶり」

「はーい。そろそろ始めさせてもらいまーす。俺は、ディアベル職業は、気持ち的にナイトやってます。」

そう言っていると、「ほんとは、勇者って言いたいんだろ」という声が聞こえてくる。

「まずは、パーティーを組んでみてくれ。」

へ?パーティーを組め?僕どうしよう?一人ぼっちになっちゃう……

「大丈夫だよ。ユキナ君、私達と組もう」

へ?達、達ってどうゆうこと?

「もしかして、もう組んでるの?」

「ん?うん、そうだよ。」

「分かった。じゃあ、誘って」

「オーケー」

「パーティーに加入しますか？」の確認ダイアログにYESのボタンを押す

「ん。よし、頑張ろうねユキナ君」

「ああ、と言つても明日だけだな。」

「えへへ。」

「そろそろ良いかな、まずは、ボスの武装だけど……」

「ちよつと、またんかい！」

「発言は、うれしいけどまずは、名乗るべきだね。」

「ワイはキバオウつちゆうもんや、この中で詫び入れんなああかんやつがおるはずやこの中で、そうやな、最低2人やな

その2人にため込んだ金やアイテム、情報を全部吐き出してもらはなパーティーメンバーとして命は、預かれんし、預けられん!!

わかつとるやろ、出てこいや!!」

その2人は、わかっている。その2人は、僕とキリト

「発言良いかな？」

と、サキ

「ええ、やろう」

「私のパーティーメンバーに2人ベータテスターがいるけど、その2人は、情報を独占するどころか、教えてくれた。皆が皆、情報を独占してる訳じゃないし、優しい人は、たくさんいる」

「だから、なんや？」

「だから、その2人のうちの1人に教えてもらおうよ。だからさ、お願いユキナ君」

僕かよ、僕に来たのかよ、後でサキになんか奢って貰おうかな……

「良いよ、ベータの時では、武器は、斧とバックラーHPのラスト1本が赤くなったらタルワールに持ち替えて、縦切りの攻撃が、中心となる、ここままで、何か無い？」

「ええか、ユキナはんワイは、知つとるんやで、お前が、ラストアタックを取りまくったことを」

「で？なに？今関係ないだろ？続けるけど……」

こうして、ボス攻略会議は続く

その後・・・

「それで、ボスのパターンは今メツセージで送った通りだ。明日の10時にここに集合とする。では、解散!!」

というディアベルの掛け声で、どのパーティーも散っていく。

「それじゃあ、サキまた明日な。」

と、俺は逃げようとしたが、

「ストップ、ユキナ君」

と、いう声で止められる。

「な、なんででしょうか?」

と言われ振り向いてみると、

「せっかくだから、皆にお風呂貸してあげたら?」

と、サキが言うとおそらくお風呂好きなのであろうアスナとユウキが超高速ダッシュユでやってきた。

「ゆ、ユキナ君!!お風呂、お風呂あるの?」

「あ、あるけど」

「ユキナ、ぼ、ボク、ユキナの家に住むことにするよ。」

「ユウキそれは、いろいろな意味でだめだ。」

何か誤解が立ちそうだし、それに・・・それに隣に居るサキさんの視線が無茶苦茶怖い

「ええー」

「まあ、入りに来るだけならいいけど・・・」

「やったー!!」

「毎日、来るなよ!!」、と思いつつ家に案内する

ーユキナがとった宿ー

「ここが、ユキナがとった宿かあー、で、早くお風呂お風呂!!」

内心「はあー」とため息を付きつつ「ここだよ。」と、案内する

「イヤッホーイー!!ボク1番♪」

僕は隠れて、「はあ」とため息をついた

「ユキナ君疲れたの?」

とアスナが心配してくれる

「だいじよぶだよ、少し苦手なだけだから」

「苦手って何が？」

「知らない人と関わるのがだよ。」

▽▽▽ アスナ

ユキナ君リアルでは、人見知りだったのかな。

でも、マナー違反になるし聞いちゃいけないよね。

それにしてもユキナ君って本当は女の子なのかな？

髪の毛長いし……でも仕草は男の子に見えるし、どっちなんだろ？

▼▼▼ ユキナ

部屋に来てもらうのは、良いけど、んーまあ、いつか。

少し休憩しようといすに座ると僕に休憩なんて入れさせないつもりか、「コンコンココン」という少々普通ではない特別なノックの音が聞こえてきた。

「どうぞ。」

と、いって家に入れていやると、

「ご無沙汰だな、ユキ坊、それにサーちゃんもいるのか。その女の子は誰なんだ？」

「ああ。」と言ってアスナのことを紹介する。

「ナルホド、ユキ坊は、女たらしつと、最新情報ができたナ」

「違う。彼女らは、風呂を借りに来ただけだ」

と、反論してみる。

「まあ、そうゆうことにしといてやるヨ。」

つたく、そうゆうことってなんだよ。変な噂流すなよアルゴ

「ユキ坊、例のことだが……ヨンキュツパだ。」

「この剣だけに4万9千800コル」

無駄に使うにも程があるだろと思いつつ、「そいつの名前に500コル出す。そのプレイヤーの名前は？」

「少し待て。ユキ坊今確認する」

「早くしてね」

と言うとすぐに「教えても構わないソーダ」と言って来たのでアル

ゴに500コルを渡し「そいつの名前、何？」と聞くと「ユキ坊もよく知ってる奴だ」

僕は少し考えてから「分かんない誰？」と聞くとアルゴはやれやれと首を振ると「キバオウだ。」と答えてくれた

キバオウ、そいつは、ついさつきベータテスターを批判しまくった、自分勝手にも思える男だ。

「なるほどね。でもいくら掲げられてもこの剣を売る気は、無い。」

「ナルホド。分かった。今日はもう帰るヨ。ただ、夜装備に着替えてもいい力？」

「どうぞ。」と言って、僕はアルゴを風呂に案内する。

「ウム。」と言って中に入っていくが、確か中には、まだユウキが、…と、考えてから動く間もなくサキに体をしっかりとホールドされる。

「ユークーナ君。」とサキの聞いた声の中で一番怖い声で「いちよう、私が目隠ししてあげるけど、目、あけたら明日の日の出が拝めない様なことされるからね？それに、アスナに任せておけば何とかなるよ。」

と言うが、まいったな。目隠しがなかったらユウキに殴られて死んじゃうし、かと言ってこの状態は、勘違いされそうだけど…死ぬくらいなら

「それじゃあ、事が収まるまで、お願いします。」

「了解。ユキナ君」

とサキが言った直後に

「わああああああああ!!」

と、言うユウキの声と、

「ナアアニイ!!」

と、言うアルゴの声が、

部屋中に響いた

そのあと、アスナが上手いことしてくれたのか、僕は次の日無事に朝日を拝むことができた。

ボス戦

「欠員は、いないようだね。俺から言うことは1つだ、勝とうぜ！」
というディアベルの声に続いて周りから、「おおー！」という声が聞こえる。

「ユキナ、死んだらだめだからね。」

と、サキが言うので「簡単に死ぬ気はないよ。」と言り返す。隣では、アスナ、ユウキ、キリトも同じように励まし合いをしていた。

「じゃあ、いくぞー！」

という声に続いて攻略組が突入する。

「戦闘開始ー！」という声が響いて、ボス「イルファング・ザ・コボルドロード」と、その手下「ルイン・コボルド・センチネル」が、ポップした。

「おりゃあああー！」

と言いながら、キバオウがセンチネルに攻撃した。

少し経って・・・

▽▽▽

ギイイイーンという音と共に僕は、センチネルの攻撃をパリイした。

「スイッチ」

そう叫ぶと、アスナ、サキ、ユウキそれぞれが3体のセンチネルに攻撃を加えポリゴン片へと変えた。

横目でボスを見てみると、ラスト1ゲージが、レットゾーンになっていた。たしか、曲刀カテゴリの縦切りのはずだ。ベータ時代なら。

シャランという音と共に引き抜かれたモノは少し違った。あれは、そう、ここでは絶対に出てこないはずの・・・そう考えた瞬間に叫んでいた。

「だめだ！。全力で、後ろに跳べー！」

しかし、遅かった。

ディアベルのパーティーのプレイヤーが後ろに跳んだ時には、ここ

では出ないはずのスキル《カタナ》スキル（緋扇）によって、ディアベルのパーティーのプレイヤー5人が吹き飛ばされた。HPを見ると、そのうちの一人のHPがいつきにゼロに近ずきやがてなくなったHPがなくなつたそいつは体をポリゴン片へと変え、死んでいった。

「うわああっ！」という悲鳴が響く。
くそ。どうする、どうすればいい。

そう考えていると、ディアベルが

「皆とりあえず落ち着くん。落ち着いて10歩入口のほうに下がれ!!」

と、指示する。

さすが指揮官。GJ!、と思いつつ俺は、アスナ達に「お前たちも下がれ!」と指示しようとしたが、その思考を先読みしたのか、「私たちも行くよ。パーティーメンバーだから。」と、言われれば、何も言い返すことができない。

「分かった。」

と答えてから、

「手順は、センチネルと同じだ!」と指示する。

ギイイイーンという音と共にコボル・ド・ロードの攻撃をパリイし、「スイツチ!」と叫ぶが、もうロードのほうが攻撃モーションに入っている。

とつさに僕は、「サキ!」と叫ぶ。

ギイイイーンという音と共にコボル・ド・ロードの攻撃をサキがパリイする。

「せああああ!!」と言う声とともにアスナ、ユウキ、サキ、キリトの攻撃が降り注ぐ。

「ぐるあああ!!」という咆哮と共に僕に攻撃が降ってくるが、硬直でパリイできずに受けてしまいHPが3割ほど減っていく。

「ユキナ!!」と叫んでサキが駆け寄ってポジションを渡してくれる。
続けてアスナが攻撃を加えようとするが、あれは硬直が短い。

アスナに攻撃が当たる瞬間に「うらああああ!!」と言う雄叫びと共に、パリイされるあれは斧だ。

ナイス。と思いつつディアベルに「ゴリ押ししろ!!」と叫ぶと、ディアベルは、小さくうなずき、「全員突撃!!」と叫んだ。10分後ボスは倒れ、コングラチレーションの表示と共に歓声が訪れた。しかし、「なんでやー!」と言う声が響き、「なんで見殺しにしおった!」と言い放つ。

「見殺し?」と聞き返したら、「そうやろが!おまえは、ボスの使う技知つとたやないか。」

「あいつベータータテスターだ。」と聞こえ、「やつぱりあいつ自分がラストアタックボーナス取りたいからって隠してたんだ!」とか「ベーターとチーターだから、ビーターだ!」とかとか聞こえる。

まずいこのままじゃと考えた瞬間にある1つの考えが浮かぶがこれは、後々まずいことになるかもしれない。しかし、今はこれしかない。

だが、その行動を起こす前にキリトと、ディアベルが発言した。

「待ってくれ皆、死人は確かに出てしまった。しかし、ユキナが動かなかつたらどうなった?」

もつと死人が、増えたんじゃないか?」

と言うディアベルの意見に、「たしかに」とか、「そうだな。」と言う声加わり始めるが、パーティーメンバー5人が死んでしまったパーティーのリーダーたちのうちの1人が、俺に向けてこう言い放った。「皆、だまされるんじゃない!そいつ、そいつは、怖かったんだ!LAをベーターの時に取りまくってたって言うお前、《demonzuユキナ》だろ!!それで、ここでもLA取りたいけど、取られそうだからって、見殺しにした。違うか!!悪魔!!」

まずい、こうなったらもうどうすることもできない。ここまで言われたなら、もう・・・

「待って、」と俺の思考を遮ったのは、パートナーであるサキだった。「待って、ほんとは、ディアベルさんも、ユキナ君と同じベータテスターよ。でもディアベルさんは皆のために、ゲームクリアのために戦った。だから、そんな、悪くない！」

と、サキが言ってくれるが、こんなことだけでは、元にもどらならない。そう、俺は、知っていた。

死んでしまったパーティーの1つF隊のメンバーの確か、(ジョー)だっただろうか。

ジョーは、サキに向かって、

「お前、今さつきから随分とあの、悪魔のの肩を持つな、お前も本当は・・・」

もう聞いていられなかった。サキ達がPKされないなら、僕はもうどうなってもいい。

もうあれをするしかない。

「く、くくく、ははは。ふはははは、あはははは。

お前ら馬鹿か、聞け！SAOのCBT(クローズ・ド・ベータテスター

の略)には、抽選で1000人当選した。しかし、その9割は、レベリングのやり方も知らない出来立てほやほやのニュービーばかりばかりだったよ。でも、俺は違う誰も到達できなかった層まで行き力タナを使うモンスターと散々戦ってきた、だから見てもすぐに対応することができた。ほかにも知ってるよ、情報屋なんて問題にならないくらいね。」

これでいい、これで、ベータテスターへの怒りなどは、すべて僕に向く

「やっぱり、やっぱりお前がお前がああ！ビーターがああ」

「僕は、2層に行くけどついてくるならmobと僕に殺される覚悟しとけよ」

2層に続く階段を俺は昇って行った。

▼▼▼ サキ

私は、ユキナ君がどういう気持ちで言い切ったのかを大体理解して

いた。

つまり、ユキナ君は、一人で全部背負い込むつもりなのだ。そんなの私がさせない。絶対に!!

「アスナ、ユウキ、私、行くね」

「行ってきたら、大事な人の所に」

とアスナとユウキがニヤニヤしながら言ってきた。

ん?なんでニヤニヤしてるんだろ

まあいいや、早く追いかけなきゃ

▽▽▽ シロ

「ユキナ!!」

とサキに呼び止められた。

「何?」

と、俺は答える

「待って、私も行くよ」

「なんで?」

「友達だから。私がいつでもシロ君を支えてあげるって約束したし。

さあ、行こう次の層へ、」

と手を差し出してくれるが僕はその手を振り払いサキを階段から突き落として僕は歩いて主街区を目指した

???
サキ

ドンツと言う音と共に私の体が宙に浮いた。いやユキナに私は突き落とされたと分かったときには、階段から転がり落ちて呆然としてからだった

討伐作戦

▽▽▽

現在の最前線は39層今日の攻略はお休みだ。なぜならば、お正月だからという理由が半分、もう半分は…ギルド「ブラツティーキャッツ」の討伐作戦の決行日だからだ。

▼▼▼アスナ

「いい、皆聞いて！今日こそ、ブラツティーキャッツを討伐ます。作戦は昨日伝えたとうりです。何があってもあせらないように。行くわよ。」

ブラツティーキャッツが居る洞窟前

▼▼▼アスナ

「全員、突撃ー!!」

「うおおお!!」

と言う声と共に攻略組が突撃し始める。

数分が経過して、残っていたのは、ほんの少しだけだった。

1人の(ブラツティーキャッツ)のプレイヤーが「くそっー」と、毒付き突然小さなボールのようなものを投げた。

そのボールからは、?ぷしゅー?と言う音を立てて、煙が立ち込める。

ディアベルが「逃すか」と叫んで追いかけて行くが、真っ白い煙りに視界を奪われたから誰も何も見えなかった。

煙りが晴れてからはそこには誰も見当たらなかった。

▼▼▼ユウキ

討伐作戦が終わってからは、ユキナやサキとは何も話せなかった。だって……ユキナはあの時……

▽▽▽ユキナ

「……ハアッ!」と言う俺の咆哮と共に相手の剣をキーンと言う音

と共に弾いた。

現在攻略組の方が劣勢だ。それは、突入と同時にブラッディキヤッツのメンバーが襲いかかり、いつの間にか後ろからは小さいが確かな破碎音が聞こえ、攻略組はアスナが事前に伝えられていたような連携は取れずに次々と死人が出てしまった。

その時から俺は少しおかしくなってしまったのかもしれない。

▼▼ユウキ

ボクが数えた中でおそらく7人目の死者が出てからユキナが少しおかしかった。何故なら……

「く……ははは……あはははは」

と笑いながら次々と今まで躊躇していた殺人を躊躇わずにしていたからだ。

これには、アスナやサキ、ボクやキリトも驚いていた。

「消えちゃえ」と言つて次々とブラッディキヤッツのメンバーを次ぎ次ぎと殺して行った

奇跡的に最後の20人くらいは、殺されずに逃げたけど本当は監獄に行つて欲しかったな。

▽▽ユキナ

遂にやつちやつたなあ大量殺人……と思いつながらアジトを抜ける

途中でサキやユウキが止めるような声が聞こえたけどそこは聞こえない振りで無視する

ちなみに今の僕は怪しき満点の茶色いローブを着ているなぜかと言うとあの、長い髪と緑の目を隠すため……かな？

自分でもよくわかんないけどなんとなく着てる

そつと主街区に戻ると自分が取った宿屋に戻る

ボスウと言う音が出そうな勢いでベッドに倒れ込むと軽くジタバタしてストレスを発散させる

月明かりに照らされて鏡に写った僕の目が綺麗に輝いている
そつと目を閉じると今でも脳裏に甦ってくるあの日の出来事
そう、あれはまだ僕が小学生のころ………だったっけ